

しんぱん

しどうようもんしゅう

新版 指導要文集

だいいつしよう

しんじん

きほん

第一章 信心の基本

きゅうどう

ぎょうがく

にどう

求道（行学の一道）

「法に依つて人に依らざれ」と説かせ給いて候えば、経
のごとくに説かざるをば、いかにいみじき人なりとも
御信用あるべからず候か。

(001 唱法華題目抄)

求道(行学の二道) 12ページー14行

むどうしん もの

無道心の者、

しょうじ

離

生死をはなるることはなきなり。

(005) 開目抄

かいもくしょう

求道 (行学の一道)

ぎょうがく

にどう

121 ページー8行

いまだ淵底を究めず法水に臨む者は深淵の思いを懐き、
人師を見る族は薄氷の心を成せり。ここをもつて金言
には、「法に依つて人にいらざれ」と定め、また爪上の土
の譬えあり。もし仏法の真偽をしる人あらば、尋ねて師と
すべし。求めて崇むべし。

（034 聖愚問答抄上

求道（行学の二道）

550 ページー15行

仏法はあなたがちに人の貴賤には依るべからず、ただ経文
を先とすべし。身の賤しきをもつて、その法を軽んずること
となかれ。

(034 聖愚問答抄上)

求道(行学の一一道)

555 ページー5行

この書、
御身を離さず常に御覽あるべく候。

（036 如説修行抄

求道（行学の二道）

605 ページー11行

によせつしゅぎようしう

そらう。

しよ

おんみ

はな

つね

ごらん

そらう。

この文を、心ざしあらん人々は寄り合つて御覽じ、料簡
候いて、心なぐさませ給え。

(122 佐渡御書)

求道 (行学の二道)

1291 ページー12行

いっさい しょにん
一切の諸人、これを語れ。

けんもん こころざし ひとびと たが
志有らん人々は、互いに

かた

(127 法華行者逢難事

ほつけぎょうじやほうなんじ
きゆうどう ぎょうがく にどう
求道 (行学の二道)

1303 ページー14行

わ

もんけ

よる

ねむ

た

ひる

いとま

とど

あん

我が門家は、夜は眠りを断ち昼は暇を止めてこれを案ぜ

いつしょうむな

す

よ。一生空しく過ごして万歳悔ゆることなけれ。

と

きどのごしょ

しかだんみんごしょ

(137 富木殿御書 (止暇断眠御書)

きゆうどう

ぎょうがく

にどう

求道 (行学の二道)

1324 ページー8行

にちれん もんか よる ねむ じかん

ひる すんか お

いつしょう

日蓮の門下は夜は眠る時間をさき、昼は寸暇を惜しんで、一生

じょうぶつ

かんが

いつしょう

むな

す

成仏のことを考えなさい。一生を空しく過ごしてしまつて、

えいえん

こうかい のこ

永遠にわたる後悔を残してはなりません。

ほうもん

ぎり

あん

ぎ

詳

この法門は、義理を案じて義をつまびらかにせよ。

(160 三大秘法稟承事 (三大秘法抄)

求道 (行学の二道) 1387 ページー17行

この大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべし。

（162 曽谷入道殿許御書 そやにゅうどうどのもとごしょ 1408 ページー14行）

この大法（大聖人に仏法）を弘めるためには、釈尊一代の聖教を備え、八宗（俱舎、成実、律、華嚴、三論、法相、天台、真言の各宗派）がよりどころとしている書物を学ぶべきです。

この御文は、藤四郎殿の女房と常によりあいて御覧ある
べく候。

（193 同生同名御書
求道（行学の二道）

1519 ページー13行

道のとおきに心ざしのあらわるるにや。
道のとおきに心ざしのあらわるるにや。
道のとおきに心ざしのあらわるるにや。

みち

遠

こころ

頬

(241 乙御前母御書)

おとごぜんのははごしょ

求道 (行学の二道)

きゅうどう

ぎょうがく

にどう

1684
ページー
16行

じとう じとうとう ねんぶつしゃ ねんぶつしゃとう にちれん あんじち ちゅうや た
地頭・地頭等、念佛者・念佛者等、日蓮が庵室に昼夜に立
ちそいて、かよう人もあるをまどわさんとせめしに、
あぶつぼう 檻 背負 よなか たびたびおん 渡
阿仏房にひとつをしおわせ、夜中に度々御わたりありしこ
と、いつの世にかわすらん。ただ悲母の佐渡国に生まれか
わりてあるか。

(265 千日尼御前御返事 (真実報恩経の事)

せんにちあまごぜんごへんじ しんじつぼうおんぎょう こと
きゅうじう ぎょうがく にどう
求道 (行学の一一道)

1741

ページ 10 行

にちれん 恋
日蓮こいしくおわせば、常に出づる日、ゆうべにいづる月
をおがませ給え。いつとなく日月にかけをうかぶる身なり。

拝

(269) 国府尼御前御書

こうのあまごぜんごしょ

きゅうじゅうじゅう
求道 (行学の一一道)

にどう

1756 ページー2行

つね い ひ タ 出 つき
み み み み み み

行学の一一道をはげみ候べし。行学たえなば仏法はあるべからず。我もいたし、人をも教化候え。行学は信心よりおこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせたも給うべし。

(280) 諸法実相抄

求道(行学の一一道)

1793 ページー3行

行・学の一一道を励んでいきなさい。信心の実践、教学の研鑽がたえてしまえば、仏法の生命はありません。自らも実践し、他の人にもこの仏法を教えていきなさい。行・学は信心からおこほかひとぶつぽうおしがくしじんがくじっせんきょうがくけんきんみづかじっせんがくしじん

ちから

たにん

ぶつぽう

いちもんいつく

つてくるのです。もし力があるならば、他人にも仏法の一文一句で
あつても語つていきなさい。

よ で し と う わ し ょうり しゅぎょう た m ちしや
予が弟子等は、我がごとく正理を修行し給え。智者・
がくしょう み せん あ

学匠の身となりても、地獄に墮ちては何の詮か有るべ
じごくく お なに せん とな
き。詮ずるところ、時々念々に南無妙法蓮華経と唱うべ
ときどきねんねん なんみょうほうれんげきょう とな

し。

(281) 十八円満抄

じゅうはちえんまんしょう

求道 (行学の二道)

にどう

1803 ページー1行

きゅうどう

ぎょうがく

ほけきょう ほうもん 聞

聞

しんじん 励

励

法華經の法門をきくにつけてなおなお信心をはげむを、
まことの道心者とは申すなり。天台云わく「從藍而青

（藍よりして、しかも青し）」云々。この釈の心は、

じゅうらんにしよう

真

は

あお

うんぬん

しゃく こころ

（藍よりして、しかも青し）」云々。この釈の心は、

藍

は

染

青

あいは葉のときよりも、なおそむればいよいよあおし。

ほけきょう

藍

しゅぎょう

深

青

がごとし。

（297 上野殿後家尼御返事

うえのどのののごけあまごへんじ

きゅうどう

ぎょうがく

にどう

求道（行学の二道）

1834

ページー1行

ほけきょう

さんだいひほう

なんみょうほうれんげきょう

ほうもん き

法華經（三大秘法の南無妙法蓮華經）の法門を聞くたびにますま

しんじん はげ ひと どうしんしゃ ぶつどうしゅぎょう はげ ひと
す信心に励む人を、ほんとうの道心者（仏道修行に励む人）と
いうのです。天台大師は摩訶止觀の中で「（青は藍より出でて）しか
も藍より青し」と述べています。この釈の意味は—藍は葉の時より
も、染めれば染めるほど、いよいよ青い色が濃くなる。法華經
(御本尊)は藍のようなもので、信心の修行が深いことは、藍が
染めるにしたがつてますます青くなつていくようなものである—とい
うことです。

いかに賤しき者なりとも少し我より勝れて智慧ある人に
いや もの すこ われ すぐ ちえ ひと
きよう 謂 と たず たも は、この経のいわれを問い合わせ尋ね給うべし。

(374) 松野殿御返事 (十四誹謗の事)

求道（行学の一一道） 198 ページー14行

1988

九三

ぎょうがく

に
ど
う

まつ のど のごへんじ ジゅうしひぼう こと

۲۷۱

ごせ ねが か せつせんどうじ
後世を願わんには、彼の雪山童子の「とく」そあらまほし
くは候え。誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば、
わ しんみょう す ぶつぽう う たよ みひん ふせ たから
我が身命を捨てて仏法を得べき便りあらば、身命を捨て
て仏法を学すべし。

(374 松野殿御返事 (十四誹謗の事)

まつのどのごへんじ じゅうしひぼう こと
きゅうどう ぎょうがく にどう
求道 (行学の二道) 1993 ページー7 行

法門 ほうもん

佐渡くに 佐 渡くに

流 うる

そうら

いぜん

ほうもん

法門のことば、さどの國へながされ候いし爾前の法門
は、ただ仏の爾前の經とおぼしめせ。

ほとけ

にぜん

きょう

思

(385 三沢抄 みさわしょう)

きゅうどう

ぎょうがく

にどう

求道 (行学の一一道)

2013 ページー8 行

にちれんだいしょうにん

ほうもん

さど るざい

いぜん

(日蓮大聖人の) 法門は、佐渡へ流罪された以前のものについて

しゃくそん

いちだいしょうぎょう

にぜんきょう たちば

ては、釈尊の一代聖教のなかにおける爾前教の立場のように
おも
思いなさい。

かかる所へ尋ね入らせ給いて候こと、いかなる宿習
なるらん。釈迦仏は御手を引き、帝釈は馬となり、梵王
は身に隨い、日月は眼となりかわらせ給いて入らせ給い
けるにや。ありがたし、ありがたし。

（399 新池殿御消息

求道（行学の二道）

2061 ページー4行

後世を願わん者は、名利名聞を捨てて、いかに賤しき者
なりとも法華經を説かん僧を生身の如來のごとくに敬う
べし。

(400 新池御書

求道 (行学の二道)

2068 ページー17行

まつぽう 今 日 頃 ほけきよう いつくい ちげ 謂 たず
末法のきょうこのごろ法華経の一句一偈のいわれをも尋ね
と ひと 有 難

問う人はありがたし。

(407 妙法尼御前御返事 (一句肝心の事)

求道 (行学の一一道) 2098 ページー8 行

まつぽう こんにち ほけきよう いっくいちげ しゅし
末法の今日において、法華経の一句一偈の趣旨をたずね問う人は
まれです。

によにん

み

女人の身として度々かくのゞ」とく法門を尋ねさせ給うこと

ただごと

は、ひとえに只事にあらず。

たびたび

ほうもん

たす

たも

(412 妙一女御返事 (事理成仏抄)

みょういちによごへんじ

じりじょうぶつしそう

求道 (行学の一一道)

きゅうどう

ぎょうがく

にどう

2134 ページー6行

がくもんみれん
学問未練にして名聞名利の大衆は、予が末流に叶うべからざること。

みょうもんみょうり
につこうゆいかいおきぶみ

（456）日興遺誠置文

きゅうどう

ぎょうがく

にどう

求道（行学の一一道）

2196
ページー3行

とうもんりゅう

当門流においては、御書を心肝に染め、

極理を師伝し

いとま
あ

だい
け
き

て、もし間有らば台家を聞くべきこと。

につこうゆいかいおきぶみ

（456）日興遺誠置文

きゅうどう

ぎょうがく

にどう

求道（行学の二道）

2196
ページー7行

下劣の者たりといえども、我より智勝れたる者をば、仰い
で師匠とすべきこと。
ししよう

（456）日興遺讖置文

求道（行学の一一道）

2196 ページー13行

げれつ もの

われ

ちすぐ もの

あお